

【学位論文（聖心女子大学大学院修士課程修了）】

1. 薊理津子（2006） 恥と罪悪感の機能についての検討—Tangney の shame、guilt 理論を基に—.

近年の欧米での研究において **guilt** は道徳的感情で適応的に人々を導くが、**shame** は非道徳的感情で不適応的に人々を導くと示唆されている。本論文では、この議論が本邦の恥と罪悪感にも適用できるのかどうかについて実証的に検討した。その結果、屈辱的恥が不適応的機能を有し、罪悪感が適応的機能を持つことが示された。つまり、恥と罪悪感の対比というよりも、屈辱的恥と罪悪感の対比で、欧米の知見が支持された。

【査読論文】

2. 薊理津子（2008）. 恥と罪悪感の研究の動向. 感情心理学研究, **16**, 49-64.

これまで恥と罪悪感は類似した情動と見なされていたが、近年の研究から恥が不適応的、罪悪感が適応的であるといった、それぞれ異なる性質を持つことが明らかにされてきている。本論では、近年の恥と罪悪感に関する研究をレビューした。そして、応用的研究の展望として、恥と罪悪感の予期による逸脱行為の抑止という点から教育への応用と、恥と暴力に関連するテーマとして近年論じられるようになってきた屈辱感について述べた。

3. 薊理津子（2010）. 屈辱感，羞恥感，罪悪感の喚起要因としての他者の特徴. パーソナリティ研究, **18**, 85-95.

他者の特徴（叱責者）が、屈辱感，羞恥感，罪悪感の喚起に及ぼす影響について検討を行った。その結果、嫌いな人間に叱責されると屈辱感、機嫌を損ねたくない人間に叱責を受けると羞恥感、さらに、好かれない人間に叱責されると罪悪感が喚起された。また、構造方程式モデリングの結果、叱責者の違いが直接関係修復反応に影響を与えるのではなく、それらの間に罪悪感と屈辱感の感情が媒介することが見出された。

【紀要】

4. 薊理津子（2006）. 恥と罪悪感の機能の検討—— Tangney の shame、guilt 理論を基に——. 聖心女子大学大学院論集, **28**, 77-96.

本論文は、2006年に聖心女子大学大学院文学研究科社会文化学専攻に提出した修士論文の一部である。

5. 薊理津子（2007）. 屈辱感・羞恥感・罪悪感の関連要因の検討——他者要因と道徳基準・優劣基準の視点から探る——. 聖心女子大学大学院論集, **29**, 89-105.

批判を受けるなどの社会的苦境場面から生じる感情に屈辱感、羞恥感、罪悪感の3つの感情があり、それぞれ異なる心理的機能を有する。本論では3つの感情を分岐する要因について検討した。その結果、他者から優劣基準で低い評価を受けると屈辱感が生じ、一方、

道徳基準で低い評価を受けると罪悪感が生じることが示された。

6. 薊理津子 (2008). 大学生における屈辱感が喚起される状況. 聖心女子大学大学院論集, 30, 115-129.

攻撃行動など多くの社会的問題に関連している屈辱感が生じる状況を収集、整理した。その結果、屈辱感是对人場面において喚起されることが多く、また、喚起要因として「劣位者としての扱い」「失態・見られたくない姿の露出」「敗北・能力の低さの自覚」「裏切り」「批判・叱責」「大切にしている人・モノ・考え・信念への侮辱や否定、傷つけ、不理解」「責任転嫁・理不尽的批判」「追放・孤立」の8つのカテゴリーに分類された。

7. 薊理津子 (2009). 屈辱感・羞恥感・罪悪感の状態尺度と、恥、罪悪感の特性尺度との関連性の検討. 聖心女子大学大学院論集, 31, 95-108.

恥を屈辱感と羞恥感とに分け、それに罪悪感を加えた屈辱感、羞恥感、罪悪感の状態尺度と、恥と罪悪感の特性尺度との関連性について検討を行った。その結果、羞恥感と罪悪感とは恥と罪悪感の特性尺度との間に類似した相関のパターンを示した。つまり、屈辱感とは羞恥感と罪悪感とは異なる性質を持っていることが示唆された。

【書籍】

8. 薊理津子 (2008). Topic4 屈辱感. 永房典之 (編), なぜ人は他者が気になるのか? — 人間関係の心理. 金子書房. pp.58-59.

現代人の対人心理、とりわけ他者を気にする様々な場面での認知・感情・行動を説明した本である。筆者は「Topic4 屈辱感」において、屈辱感の心理的機能について述べた。

9. 薊理津子 (2009). 8章 屈辱感と共感的羞恥. 菊地章夫, 有光興記 (編), 自己意識的感情. 北大路書房 pp.142-159 (内, 「屈辱感」担当 pp.142-152)

対人場面で自己意識を介在して経験される感情である恥や罪悪感、妬みなどの自己意識的感情について、これまでの研究知見を総括し、今後の展望を示唆した本である。筆者は「8章 屈辱感と共感的羞恥」を共著者と分担し、その内「屈辱感」を担当した。

【学会発表 (ポスター・口頭)】

10. 薊理津子・余語真夫 (2003). 自己意識感情 (恥・罪悪) と怒り・攻撃性との関係. 日本感情心理学会第11大会プログラム・予稿集, 15.

欧米の研究から、恥傾向が怒り・攻撃性を促進し、罪悪感傾向が怒り・攻撃性を抑制することが示されている。本研究では、この知見について、TOSCA-3を用い、日本人大学生を対象に追試した。その結果、先行研究を支持するものだった。恥と罪悪感とは自己意識感情として同類に扱われるが、その機能に相違があることが示唆された。

11. 薊理津子 (2004). Test of Self-Conscious Affect-3 の「恥」「罪悪感」研究への適用可能性の検討. 日本社会心理学会第 45 回大会発表論文集, 430-431.

欧米では TOSCA-3 が shame と guilt の測定にしばしば使用されている。本研究では、本邦における TOSCA の妥当性について検討した。その結果、TOSCA で測定している shame と guilt が本邦の恥と罪悪感に必ずしも対応しているとは示されず、本邦で使用するには不適當であることが示唆された。

12. 薊理津子 (2005). 恥, 罪悪感に関する Tangney 理論の検討. 日本社会心理学会第 46 回大会発表論文集, 556-557.

恥と罪悪感の心理的機能について検討した。その結果、屈辱感に代表される恥の意識は怒り、逃避、他者への責任転嫁を促進し、不適応的であった。一方、罪悪感には修復行動や他者配慮を促進し、怒りや他者への責任転嫁を抑制し、罪悪感には適応的であった。しかし、罪悪感には恥より自身の行為も人格も同時に責める態度が強かった。罪悪感には自己へ帰属してしまうことと、他者志向的であるため修復行動が促されると捉えることができる。

13. 薊理津子 (2006). アルバイト場面における屈辱的恥, 羞恥感, 罪悪感の機能. 日本社会心理学会第 47 回大会発表論文集, 336-337.

他者に迷惑をかけて叱責を受けた状況について、アルバイト経験者を対象に半構造化面接調査と質問紙調査を行った。その結果、屈辱的恥は、他者への怒りや他者へ責任転嫁を促す不適応的感情であり、一方、罪悪感には他者への謝罪を促す適応的感情といえた。また、羞恥感には評価懸念と関連していた。そして、屈辱的恥は、「人格」が批判されたという認知と、罪悪感には「失敗（行為）」が批判されたという認知と関連していた。

14. 薊理津子 (2007). 社会的苦境場面における自己意識感情（屈辱感・羞恥感・罪悪感）. 日本社会心理学会第 48 回大会発表論文集, 334-335.

注意・叱責を受けるなどの社会的苦境場面で生じる屈辱感、羞恥感、罪悪感を分岐する要因について、他者の特徴という視点から検討した。その結果、嫌いな他者に注意・叱責を受けるとき、屈辱感が喚起されやすい、一方で、好かれたい他者に注意・叱責を受けると、罪悪感が喚起されやすい。羞恥感には嫌われたくない他者に注意・叱責を受けた場合に喚起されやすかった。

15. Azami, R. (2008). Humiliation, embarrassment and guilt in Japanese part-time job. XXIX International Congress of Psychology, Berlin.

アルバイト経験のある学生 92 名に、アルバイト中、叱責を受けた経験やその経験によって生じた恥や罪悪感の感情について半構造化面接と質問紙調査を行った。因子分析の結果、

屈辱感、羞恥感、罪悪感の3因子が抽出された。そして、屈辱感は怒りなどの不適応的特徴と関連し、一方、罪悪感には謝罪などの適応的特徴と関連を持っていた。

16. 薊理津子 (2008). 自己愛と屈辱感, 羞恥感, 罪悪感との関係性. 日本パーソナリティ心理学会第17回大会発表論文集, 70-71.

屈辱感、羞恥感、罪悪感と自己愛との関係性を探索的に検討した。なお、自己愛以外に、自己意識、賞賛獲得・拒否回避欲求、また精神的健康の指標として自尊心との関係性についても検討した。その結果、有能感が高い人間は、屈辱感が喚起されやすいと示唆された。また、屈辱感には公的自己意識が高いほど生じやすく、羞恥感と罪悪感には全ての特性と関連性が見られなかった。

17. 薊理津子 (2008). 屈辱感・羞恥感・罪悪感の構造. 日本社会心理学会第49回大会発表論文集, 510-511.

屈辱感、羞恥感、罪悪感の構造を確認し、心理的機能について検討した。その結果、恥は屈辱感と羞恥感の2つに分かれると示された。そして、屈辱感を感じるほど、不当な扱いを受けたという意識、排斥不安、自己不全感、身体反応が強められた。また、羞恥感を感じるほど、身体反応、排斥不安が強くなった。罪悪感を感じるほど、自責感、道徳的逸脱意識、自己不全感が高まるが、不当な扱いを受けたという意識は抑制された。

18. 薊理津子 (2009). 自己愛と屈辱感, 羞恥感, 罪悪感との関係性2. 日本社会心理学会第50回大会発表論文集, 768-769.

自己愛の過敏型と誇大型と屈辱感、羞恥感、罪悪感との関連性について検討した。その結果、過敏型自己愛は3つの感情を促進させるが、特に屈辱感を強く生じさせた。つまり、他者からの評価に関係なく高い自尊心を維持する自己愛者ではなく、他者からの評価によって自尊心を維持する自己愛者は屈辱感を感じやすく、不適応的反応が導かれることが見出された。

【学会発表 (ワークショップ)】

19. 薊理津子 (2005). 日本心理学会第69回大会ワークショップ「恥と罪悪感を測るーTOSCAをめぐってー」(話題提供者)

欧米では、恥と罪悪感の研究に Tangney(1990)による TOSCA が多く使用されており、わが国でも翻訳し使用とする研究がいくつか登場した。そうした研究から、恥と罪悪感の特徴が明確にされたが、信頼性、妥当性について疑問視する声もあがった。このワークショップでは、TOSCA について議論した。

20. 薊理津子 (2007). 日本心理学会第 71 大会ワークショップ「道徳的感情と行動—恥 (shame)・羞恥感 (embarrassment)・罪悪感 (guilt) —」(企画・話題提供者)

近年、社会の変化に伴い、犯罪や青少年の非行が問題化されており、道徳性の低下という観点から述べられることが少なくない。本WSでは、情動的側面からアプローチする研究者に最新の研究データとともに議論を行う。具体的には、恥、羞恥感と罪悪感を取り上げる。

21. 薊理津子 (2007). 日本心理学会第 71 大会ワークショップ「自己意識的感情: 向社会的・反社会的行動との関係」(話題提供者)

近年、国内でも自己意識的感情についての関心が高まりつつある。今回は共感性、恥、罪悪感について、向社会的行動と反社会的行動との関係から議論した。

22. 薊理津子 (2008). 日本教育心理学会第 50 回総会自主シンポジウム「道徳的感情と行動 2: 教育場面における恥感情の応用可能性はあるのか?」(企画・司会)

近年、犯罪や青少年の非行、それに加え、公共の場での迷惑行動などが取り沙汰されることが多い中、これらの行動を引き起こす原因として、道徳性や規範意識の低下だけでなく恥感情の低下について指摘されることが多い。恥感情は道徳的感情の 1 つとして考えられているだけでなく、特に本邦においては恥感情が人々の問題行動の抑制を規定する重要な感情だと考えられている。

23. 薊理津子 (2009). 日本感情心理学会第 17 回大会ワークショップ「ネガティブ感情のはたらき」(話題提供者)

人間関係におけるネガティブ事象の開示・コミュニケーション、屈辱感・羞恥感・罪悪感の機能、ネガティブ気分とタスクの解決など、新たな観点からネガティブ感情について討論した。